

## 宗教と健康・幸福

二〇一五（平成二十七）年に実施された第十回宗勢基本調査では、教区による寺院運営の違いや地域と寺院との関わりなど、さまざまなことがわかりました。この結果は、各教区で実施した説明会や『宗報』（二〇一六年一月号）に掲載された「中間報告（単純集計）」、宗門内の各寺院に送付した『浄土真宗本願寺派 第十回宗勢基本調査報告書』に報告されています。

第十一回調査では、寺院の現況がよりわかるよう、細や行政単位など具体的な調査分析をめざします。

第五回の今号は、宗教と個人々々人が感じる「しあわせ」について、報告いたします。

### 感染症があぶりだす人間社会の縁

今年ほど「やまい」に対する私たちの心のあり方と社会の備えが試される年はないと思われず。武漢を発生源とする新型コロナウイルスはパンデミックとなり、医療現場や社会生活、世界経済や地域経済にさまざまな苦境をもたらしました。

この感染症の収束と日常生活の回復が見込めない段階でこの原稿を書いておりますが、落ち着くまで何も考えないわけにはいきません。今、何をすべきかという話とは別に、宗教の社会的役割をいささかでも展望できる話をしてみようと思います。

世界におけるヒト・モノ・カネ・情報の指数関数的な交流拡大―グローバルバリエーションがなければ、世界的感染症は

一風土病で終わりました。言い方を変えれば、人獣感染症はいつ、どこで発生しても、現在は世界的規模に拡大する可能性があります。グローバル・ヘルスという観点に立てば、発展途上国の貧困や不衛生は、先進国も共有すべき問題なので

す。  
当面の感染拡大を阻止するため、さまざまなレベルで封鎖がなされました。中国をはじめ欧米における都市の封鎖、出入国の禁止や移動者の隔離、社会活動の自粛など、限定的なものであっても人の動きが止まれば、経済社会が立ちゆかなくなる現実を目の当たりにしました。

学校の休校やデイケアの休止は、あらためて子どもたちや高齢者の居場所の問題を浮き彫りにしました。病院や福祉施設で働く医療者・介護者を支えているのが、保育士や児童会館の職員であることも明確になったかと思われまます。このつながり―社会的紐帯は「つながろう日本」というような意欲の問題ではなく、社会的事実なのです。

グローバルなレベルでも地域においても私たちはつながっており、まさに持つ持たれつとの関係です。この事実を自覚することで利己主義的なものの考え方やふるまいはできなくなるし、縁に身を委ねることで虚無感や孤立感に陥ることもなく、悲観も楽観もせずに世の中を渡っていきけるのではないかと思えます。

私は社会学を四〇年研究して人生の苦難や社会的課題の関係論的認識に至り、絆に気づき、大事にする生き方―ソーシャルキャピタル（社会関係資本）の重要性を大学で教えています。宗教者は教えや自らの経験から因果―因縁を本質直感的に理解し、いのちの連続性や共同性を説いているのではないのでしょうか。人間や世界を子細に観察すれば、科学であろうと宗教であろうとそれほど認識に相違はなく、実践的含意にも共通点はあるでしょう。

## 苦楽と幸不幸

苦あれば楽あり、禍福はあざなえる縄のごとしとはよく言ったものです。どちらか一方だけということはありません。なぜなのでしょう。

新型コロナウイルスに対して私たちが恐れ、パニック的反応を示したのは、この感染症が弱毒性（通常のインフルエンザ程度の致死率）でありながら、特效薬がないままに感染拡大し、回復している人が多いにもかかわらず、特に高齢者や持病を持つ人にとって「死に至る病」と認識されたからに他なりません。

他方で、死につながる病気や事故はいくらでもあり、通常のインフルエンザによる日本の死者数は年間三千人を超えますし、高齢者に多い肺炎による死者数は年間十万人を超えます。こういう数値をあげても怖がる人は少ないでしょう。既知の病は怖くない、未知の病だから怖いということなのでしょう。

恐怖の源泉は、分からないことに加え、手に負えない可能性にあります。日本は、医療システムと社会政策によってこの感染症を統御可能な状態にしようとして総力を挙げています。日本人の一生を考えると、社会保障と現代医療によって生きる、老いる、病む、死ぬという諸段階で苦しみが軽減されています。ところが、感染症は突然人々に老病死を迫るのです。

私たちの幸福な日常に、突然、生命と呼べないウイルスによって生老病死の苦が入り込み、幸せと不幸せが連続していることを知ったとき、私たちは困惑するのではないのでしょうか。

二月以降、コロナウイルス感染者数と死亡者数が毎時報道され、統御不能と可能との間で専門家の診断や識者の見解を洪水のように流すマスメディア情報を聞きながら、私たちは相当なストレスを受けてきました。実際、日々の仕事に直接影響が及んだ人たちは人生すら変えたことでしょう。私自身は一枚の不織布マス

クを毎日エチルアルコールで消毒しながら二週間は使うという生活でいろいろと考えるところがありました。

私たちは苦を忘れさせる楽な日常生活によって人に生老病死の苦があることを忘れていたのではないかと。現代医学や社会政策を尽くしても統御不能なことが起こる可能性はあり、それに私たちはどの程度、社会的に精神的にレジリアンス（耐久力）を持てるのかということです。

世には病氣治しの宗教もあれば、病氣を受け入れ堪える力を与える宗教もあります。

### 宗教とウェルビーイング

ウェルビーイングとは、主観的幸福感（今日はいい感じ、人生可もなし不可もなし）と客観的生活基盤（仕事と社会保障）からなる「しあわせ」の構成的概念です。心理的指標や厚生指標、ソーシャルキャピタルの指標から測定されます。

実際、主観的幸福感に最も影響を与える三要素は、健康とソーシャルキャピタル（良好な職場・地域の人間関係と、それに基づく安心感や信頼感）、精神的ゆとりを生む時間や場所を持つことです。地位・名誉・権限の有無や学歴はほとんど関係しません。

その意味で、人々の幸福感と宗教が生み出す精神的安寧は大きな関連があること、世界各地の学術論文が明らかにしているのです。ところが、世俗化の度合いが強くと、宗教を学術から遠ざけ、医療・福祉・教育などの公共領域から距離を取る日本では、ウェルビーイングと宗教の関連を問う研究がほとんど進んでおりませんでした。

私は日本やドイツ、アメリカの研究者とも協力して研究を進めておりますが、日本と西欧の興味深い違いを発見しました。西欧のキリスト教会を中心とした宗教文化では、宗教心を持ち宗教活動をする人の幸福感はそうではない人の幸福感よりも高いのです。礼拝参加という規則

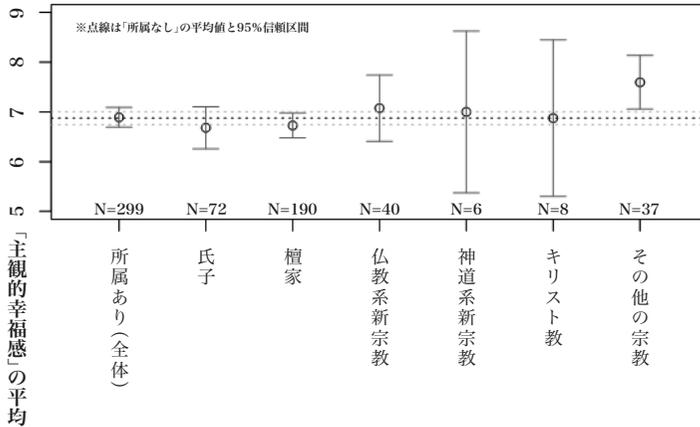


図1 主観的幸福感と宗教団体所属との関係

正しい行事と友人・知人との交わり、聖職者からもらうメンタルヘルス上のアドバイスや宗教的メッセージは、人々の幸福感を高めめます。  
ところが、日本では、宗教団体に所属している人と所属していない人では幸福感に統計的差異はありません。私が二〇

一七(平成二十九)年にランダムサンプリングで得た全国一二〇〇人対象の調査の結果です。図1において、点線が所属なしの人の主観的幸福感の平均で、教団ごとに平均(図中の○印)と誤差の区間を示しています。Nは標本数です。  
仏教で言えば、檀家として寺につながる人がいる人といない人では幸福感に差異がないのです。  
また、このことは檀家だけでしょいか。檀家に寺院を護持する住職や坊守が何の影響も与えないとしたら、僧侶と寺族は世俗の人たちとは別に、幸福感が高かったり低かったりする可能性がありません。もし、相互に影響し合っているとすると、檀家の人の幸福感が一般の人と変わらぬというのは、そもそも僧侶や寺族の幸福感が一般の人と同じだからとも言えるのです。こうなれば、宗教が生み出す精神的安寧という議論は日本に該当しないとなります。  
本稿を終えるにあたって一つの興味深い結果を示します。

一七(平成二十九)年にランダムサンプリングで得た全国一二〇〇人対象の調査の結果です。図1において、点線が所属なしの人の主観的幸福感の平均で、教団ごとに平均(図中の○印)と誤差の区間を示しています。Nは標本数です。  
仏教で言えば、檀家として寺につながる人がいる人といない人では幸福感に差異がないのです。  
また、このことは檀家だけでしょいか。檀家に寺院を護持する住職や坊守が何の影響も与えないとしたら、僧侶と寺族は世俗の人たちとは別に、幸福感が高かったり低かったりする可能性がありません。もし、相互に影響し合っているとすると、檀家の人の幸福感が一般の人と変わらぬというのは、そもそも僧侶や寺族の幸福感が一般の人と同じだからとも言えるのです。こうなれば、宗教が生み出す精神的安寧という議論は日本に該当しないとなります。  
本稿を終えるにあたって一つの興味深い結果を示します。

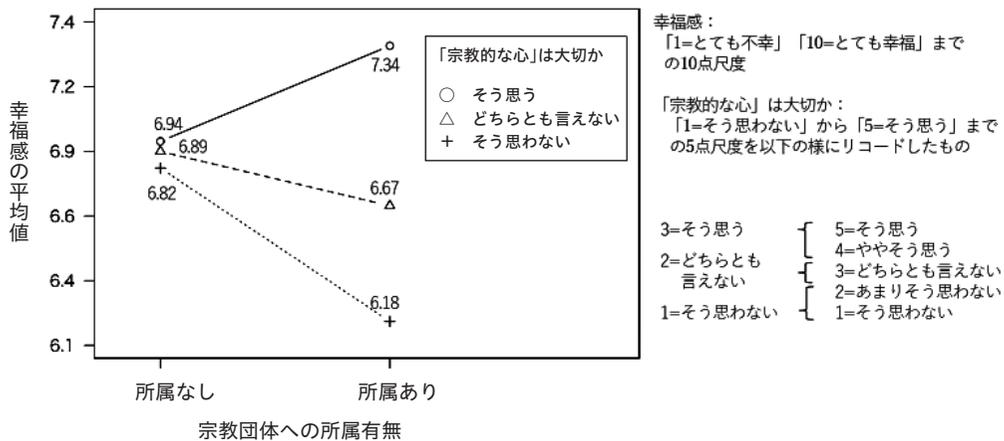


図2 幸福感に対する宗教団体所属と「宗教的な心は大切なか」の交互作用

この図2(北海道大学の清水香基氏作成)から、宗教団体への所属の有無によって幸福感に差異が出ない理由の一つが分かります。所属なしの人では「宗教的な心は大切」と思うかどうかではあまり幸福感に差異がでないのですが、所属ありの人では大切だと思う人と思わない人の差異が非常に大きいのです。結果的に、平均すると所属なしとありでは同じレベルの幸福感になってしまっているのですが、所属ありで幸福感が高い人、所属していなから幸福感が低い人がいるのです。信心のある人は幸福なのです。しかし、宗教的な心を寺は檀家に伝えているのでしょうか。

宗教とウェルビーイングの研究では、まだまだわからないことがあります。しかし、宗教が人を幸せにするという言い方には可能性もあります。日本の仏教寺院には人を幸せにする可能性と役割があると言えないでしょうか。

今回実施する第十一回宗勢基本調査では、僧侶(宗教者)の「幸福」について

も調べたいと思っています。宗教者は何に「幸福」を感じているのか、これまでの調査と比較することで、新たに見えてくることがあると期待しています。

第十一回宗勢基本調査実施センター調査研究員

櫻井義秀

参考文献

櫻井義秀編、二〇一八、『しあわせの宗教—ウェルビーイング研究の視座から』、法蔵館。

櫻井義秀編、二〇一九、『宗教とウェルビーイング—しあわせの宗教社会学』、北海道大学出版会。

※本報告は、本年(二〇二〇年)三月三十日にご提出いただいたものです。

※第十一回宗勢基本調査は、本年(二〇二〇年)七月一日を基準日として実施を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響に鑑み、実施を延期することとなりました。詳細については、次号にてお伝えいたします。

宗勢基本調査では、各寺院の置かれている現状やみなさまの本音を総合的に把握し、これからの宗門や各寺院のあり方を考えるための資料作成をめざします。引き続き、宗勢基本調査のご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

五月上月  
第十一回宗勢基本調査実施センター